

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24520183

研究課題名(和文)近代日本の<ダンス - モダンダンス>概念の形成に関する歴史研究

研究課題名(英文)A Historical Study on the Formation of the <Dance - Modern Dance> Concept in Modern Japan

研究代表者

杉山 千鶴 (SUGIYAMA, Chizuru)

早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授

研究者番号：40216346

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、成果の一部を以下により公開した。

欧米で長く活動した舞踊家・小森敏(1887-1951)について公開シンポジウムを開催し、2作品の復活上演を行った(2013年度)。日本のモダンダンスのパイオニアの多くが試作品を発表した浅草オペラについて公開シンポジウムを開催し、近代日本における一つの芸能として見直す必要性が確認された(2014年度)。『浅草オペラ 舞台芸術と娯楽の近代』(森話社、2016年度)を出版し、浅草オペラを多面的に見つめるべく試みた。また、得られた現物資料をデータ化し、現在はWeb上で公開する準備を進めている。

研究成果の概要(英文)：In this research project, part of the results were made widely open as follows.

1. We held the public symposium on Toshi Komori(1887-1951), who had long acted in the West. In this symposium, 2 works which Komori created were performed (2013). 2. We held the public symposium on Asakusa Opera where many of the pioneers of Japanese modern dance had performed works, and confirmed the necessity of viewing it as one entertainment in modern Japan(2014). 3. Published "Asakusa Opera : Performing Arts and Entertainment in modern Japan", we tried to look at Asakusa opera in a multifaceted manner.

In addition, we converted the obtained materials into data and are preparing to publish on the Web currently

研究分野：舞踊学

キーワード：西洋舞踊 モダンダンス 帝劇歌劇部 浅草オペラ 近代芸能 小森敏 パイオニア

1. 研究開始当初の背景

〈ダンス〉という語が日本に輸入された明治期（19世紀末）においては、この外来語は〈社交ダンス〉、すなわち予め決められた教則に従って行動の規範を身につけ実践する、〈交際術〉の一つとして認識されていた¹⁾。一方、明治後期（1900年代）に日本に移入したバレエは〈洋舞〉〈西洋舞踊〉という翻訳語が当てられたが、これは日本舞踊に倣ったものであった。大正期（1910～1920年代）になると〈舞踊〉〈新舞踊〉〈舞踊詩〉という語も登場する。こうした背景には、単にダンスという外来語が社会に浸透しただけではなく、従来とは異なる、創作表現である〈モダンダンス〉の登場があった。

日本では帝国劇場歌劇部（以下、帝劇歌劇部とする）のように、1910年代にヨーロッパから外国人教師を招いてバレエ教育に尽力したものの、むしろモダンダンスのパイオニアを多数輩出した。さらに彼らパイオニアのほとんどが、浅草オペラという場で試作品を発表し、今日のモダンダンスの基礎を築いている。一方で浅草に登場せず、海外で長く活動した舞踊家も存在する。

本研究課題は上記、ならびに従来の舞踊学においては舞踊家が現在行っている理論や実践などへ関心が集まり歴史研究に十分な注意が払われなかったという現状を受けたものである。

¹⁾ 永井良和(1994)：「にっぽんダンス物語、リポート」

2. 研究の目的

本研究課題の目的は以下の通りである。

(1) 舞踊家個人と集団において〈ダンス-モダンダンス〉概念がいかに認識・理解されていたのかを明らかにする。

(2) 帝国劇場や浅草オペラにおいて上演された舞踊・ダンスの実体を明らかにする。

以上によって「日本の舞踊の近代化」を考えようとするものである。

3. 研究の方法

(1) 研究目的(1)では事例を用いた。個人では、長期間にわたる海外での活動により、これまで近代日本洋舞史からは十分な検討がなされていたとは言い難い小森敏(1887-1951)を事例とした。小森は帝劇歌劇部出身であり、1917～1936年の間、欧米で公演活動を展開した。また集団では、養成機関として、舞踊ではないが結果的に舞踊家を多く輩出した帝劇歌劇部、そして上述の小森が帰国後開設した小森敏舞踊研究所を対象とする。

小森ならびに小森敏舞踊研究所に関しては、門下生のうち舞踊家で唯一生存しており、小森晩年の愛弟子であった藤井利子氏にインタビューを実施し、また藤井氏の所蔵する小森の資料の提供を受けた。

帝劇歌劇部に関しては、帝劇の発行する雑誌や文献等の他、歌劇部員が書いて雑誌・新聞等に掲載された資料を用いて検討した。

(2) 研究目的(2)に関しては、まず舞踊公演の実態を把握するために現物資料（帝劇歌劇部では絵本筋書と番組、浅草オペラでは公演プログラムと同人誌）を収集した他、資料所蔵館にて調査を進めた。併せて関連資料として公演批評文の掲載されている雑誌や新聞の記事を調査した。

(3) 本研究課題において対象となる帝劇歌劇部や浅草オペラは、音楽学、演劇学のみならず、学会等に所属しない研究者・愛好者・実践者の研究対象となっており、知見の蓄積が

ある。こうした方々を迎えるべく、公開シンポジウムを開催し、成果を公表する。

(4) 研究成果を随時公開する。学会発表や論文投稿のみならず、上述の公開シンポジウムの他、研究成果をまとめて出版する。さらに収集した現物資料はデータ化してWeb上で公開する。

4. 研究成果

(1) 本研究課題により得られた成果は以下の通りである。

① 入手現物資料のデータ化を行った。途中ハードディスクの故障があったため、予定より進行は遅くなったため、公開には未だ時間を要する。

② 日本のモダンダンスのパイオニアの中でもあまり取り上げられることのなかった小森敏に関しては、関係者を詳細に洗い出した茂木秀夫の著書『小森敏とパリの日本人—近代日本舞踊の国際交流—』（2011年、創栄出版）があるが、本研究課題では舞踊に特化し、劇歌劇部時代、欧米滞在中、帰国後について、その活動について多くが明らかになった。特に小森のフランス滞在中と帰国後のスクラップブックには公演プログラムやチラシ等が貼付されており、併せてアルバムには写真が良好な状態で多数収められており、考察の推進力となった。そしてその内容に関しては公開シンポジウム「舞踊家・小森敏（1887-1951）を知る」（2013年8月6日 於・新宿区角筈区民センター）において報告された。また、先述の藤井利子氏は小森敏舞踊研究所の教材である練習曲（ダンス・モデルヌ）のうち4曲を復元したが、公開シンポジウムではこのうちの2曲が、藤井氏の解説と共に上演された。なお欧米滞在中に関しては未だ

不明な部分が多く、今後調査を要することが改めて確認された。

なお小森は帝劇歌劇部時代にはバレエと日本舞踊を学び、その後はリトミックを経験して離日した。フランス滞在中はダルクローズ学校に通っていた。小森敏舞踊研究所のカリキュラムにはバレエとリトミックが取り入れられていたが、いずれも限定的に用いられていた。小森にとっての舞踊・ダンスとは、当初はバレエと日本舞踊であり、その後リトミックを学ぶが、限定的に用いられていたということから、これらが小森の舞踊作品を踊るためには有益であると考えられていたことがわかった。ここにバレエのみならずリトミック受容の一事例も見ることとなった。

③ 帝劇歌劇部はオペラ歌手の養成機関であったが、声楽家よりも舞踊家を多く輩出した。ここではバレエの厳しい指導がなされたが、結果として日本のモダンダンスのパイオニアたちを輩出した。そのうちバレエに反発した者もいれば、バレエを評価する者もいたが、いずれにしても彼らの身体にはバレエが刷り込まれており、彼らの〈モダンダンス〉を考える際に、この点を考慮する必要が確認された。

④ 絵本筋書をもとに、開場以後、帝劇歌劇部解散までに帝劇で上演された舞踊作品について、絵本筋書、番組などの現物資料ならびに雑誌・新聞に掲載された批評文より一覧表を作成した。当初は「西洋舞踏」に一貫しており、いずれもバレエ指導者であったミス・ミックスの振付であったと思われる。ミス・ミックスの帰国後、その後任としてG.V. ローシーが来日して以降は、「西洋舞踏」の他、「無言劇」「夢想的バレエ」「神話的バレエ」など多様化している。ここに、西洋舞踊（ミス・ミックスやローシーの搜索した作品は、写真を見る限り必ずしもバレエ技法を用いたバ

レエとは限らないため、ここでは「バレエ」とはしない)が日本舞踊の対概念という認識から、多様なジャンルを含んだ舞踊・ダンス(モダンダンスはまだ成立していない)との認識へと変容したことが読み取れた。

⑤浅草オペラでは「舞踊」「新舞踊」「ダンス」「バレエ」等と称する作品の他、「歌舞劇」「ミュージカル・プレー」「ボードビル」など、舞踊場面を含んだ作品が上演された。都新聞遊覧案内欄をベースに、新聞や雑誌に掲載された公演案内や批評文を元に、浅草オペラで上演された舞踊作品ならびに舞踊場面を含むと思われる作品のリストを作成した。また絵葉書(プロマイド)や紙誌に掲載された舞台写真より、技法ならびにオペラ役者・オペラ女優の習熟度を検証した。またモダンダンスのパイオニアである石井漠(1886-1962)、高田雅夫(1895-1929)・原せい子(1895-1977)に特化すると、発表された作品には、両者とも芸術を、また高田・原には大衆化を志向したものがあり、特に後者(=ボードビル)は高田・原が浅草を去って以後も、浅草オペラの中で息づいた。

⑥浅草オペラの舞踊を考える際には、それを成立させた浅草オペラの状態と、隣接領域である音楽、そして興行形態を切り離して考えることはできない。また浅草オペラは音楽学、演劇学、舞踊学において、構成要素ごとに個別に研究されてきている。そこで浅草オペラの舞踊のあり方を考えると共に、これを一つの近代芸能と見つめる機会として、公開シンポジウム「近代芸能としてみた浅草オペラの音楽・舞踊・演劇」(2015年3月1日 於・早稲田大学小野記念講堂)を開催した。これにより浅草オペラにおける舞踊の位置づけがなされたと共に、浅草オペラを、近代という時期において特定の地域を主とした芸能として見直さなければならないという課題

が確認された。

⑦2回の公開シンポジウムの内容を受け、浅草オペラを主軸に据えた書籍『浅草オペラ舞台芸術と娯楽の近代』(2017年、森話社)を編集・出版した。帝劇歌劇部のバレエ教師であったローシーについての新たな知見の他、浅草オペラを、音楽家・オペラ女優という提供者と専門誌にみる受容者、音楽、舞踊、訳詞という演目についての論考をおさめた。ただし公開シンポジウムによって明らかになったように、当該書籍は浅草オペラの中身の一部を扱ったに過ぎない。

(2)本研究課題の成果の位置づけと今後の展望について

本研究課題は、個別の事例を対象としたものであり、これが広く舞踊家全般、舞踊養成機関全般にあてはまるものと言うことはできない。と同時に、我が国における西洋舞踊の受容・浸透とそれに伴う〈ダンス-モダンダンス〉概念の受容と変容の一事例を提示することができた。近代日本洋舞史において、特定の概念をキーとした歴史研究はこれまでに行われていない。そして本研究課題は西洋舞踊にとどまらず、異文化受容の一事例となりうるものである。

同時に今後の調査を要するもの、今後の課題なども明確になった。これらを解決していくことが、今後の展望である。なお、本研究課題において事例とした浅草オペラは、2017年に開幕100周年を迎えた。これまでマニアックな視点から研究されてきた浅草オペラであるが、本研究課題を機に、そして100周年を区切りに、より広い視点から見つめるよう、本研究課題をより発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

①中野正昭

沢モリノの浅草オペラ時代

明治大学文芸研究 122、2014、95-11.

②中西みなみ・杉山千鶴

玉置真吉(1885-1970)の社交ダンス前史

—浅草オペラにおける活動の意義—

査読有、舞踊學 36、2014、18-24.

[学会発表] (計 2 件)

①杉山千鶴

帝劇歌劇部員・小森敏(1887-1951)の活

動、第64回舞踊学会大会

(2012年12月2日、東京都文京区)

②杉山千鶴

小森敏(1887-1951)から藤井公(1928-

2008)・利子(1937-)へ—帝劇歌劇部

に移入されたバレエの行方

比較舞踊学会第27回大会

(2016年11月27日、沖縄県那覇市)

[図書] (計 4 件)

①共著：杉山千鶴、森話社

文字の世界で踊り続ける—1920年代浅草

の女王・河合澄子

瀬戸邦弘・杉山千鶴編：近代日本の身体表

象—演じる身体・競う身体、2013：63-86.

②共著：杉山千鶴、新国立劇場情報センター

序章Ⅱ 帝国劇場歌劇部から浅草オペラ

へ

第2章 小森敏(1887-1951)—静けさを

愛する心を糧に—

片岡康子監修：日本の現代舞踊のパイオニ

ア—創造の自由がもたらした革新性を

照射する、2015：18-22.、33-42.

③共著：杉山千鶴、森話社

ベテラン vs 少女—1920年代浅草という

舞台上で輝いた女性たち

中野正昭編：近代日本演劇の記憶と文化 3

ステージ・ショウの時代、2015、113-132.

④共編著：杉山千鶴・中野正昭編、森話社

浅草オペラ 舞台芸術と娯楽の近代、2017、

290

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

[その他]

ホームページ等

①公開シンポジウム「舞踊家・小森敏(1887-

1951)を知る」企画・開催

(2013年8月6日 於・新宿区角筈区民セ

ンター)

②公開シンポジウム「近代芸能としてみた浅

草オペラの音楽・舞踊・演劇」開催

(2015年3月1日 於・早稲田大学小野記

念講堂)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉山千鶴 (SUGIYAMA, Chizuru)
早稲田大学・スポーツ科学学術院・教授
研究者番号：40216346

(2) 研究分担者

中野正昭 (NAKANO, Masaaki)
明治大学・文学部・その他
研究者番号：40409727

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()